

カミュ『異邦人』における「無関心」

鈴木 忠 士

第Ⅴ章 自然的世界

予備的考察

1 生と死の弁証法

A. 生肯定的自然

B. 生否定的自然

2 死の願望と死の不安

A. ムルソオの身体像 …… (以上, 本誌前号まで)

B. 異形の身体

C. 生命的身体

D. 共生的身体 …… (以上, 本号)

E. メランコリー

第Ⅴ章 自然的世界

2 死の願望と死の不安 (つづき)

B. 異形の身体

養老院の霊安室で、「柩の傍には、白い上張り(52)を着て派手なネッカチーフを被った(傍点は鈴木、以下同じ)看護婦がひとり居た。門番によると彼女は「下疳」で、「彼女は眼の下から顔の回りに包帯を巻いていた。鼻の頭でも包帯は平らになっていた。顔で眼につくのは包帯の白さ(53)だけだった。」霊安室が「非常(54)に明るい広間で、石灰で白く塗られ、ガラス天井で覆われていた」と言われていることに注意したい。白色ほど死を想起させる色はない。それは医師や看護婦の白衣の色であり、屍衣の白であり、墓石の白であり、白骨の白である。

しかし又白色ほど死を隠蔽する色もない。白色の与える清浄な印象が病患に冒された身体の穢れや死体の腐敗を覆い隠すのである。看護婦の包帯は「下疳」を隠しているが、その不吉な白さの故に逆に悪病の存在を暗示してもいるのである。更に彼女は死体の取められている「柩の傍に」居る。こうした光景を眼前にしてはムルソオの心の深層に凝る死の不安も次第に融解し始めざるを得ない。

夜になると霊安室に母の老友達が入ってくる。「僕は今までこんなに人を見たことはないほど、注視して、彼らの顔と衣服の細かな点を、何一つ見逃さなかった。〔……〕老婆がどれほど太鼓腹になれるものか、僕は未だかつて注意したことがなかった。男達はほとんど皆ひどく痩せて、杖を持っていた。彼らの顔で打たれたのは、眼を見られないことであった。そこには、ただ皺の巢の真ん中に、鈍い光があるだけだった。彼らは座ると、大部分が僕の顔を見ながら、歯のない口にすっかり食われた唇をして、ぎこちなく首を振っていた。⁽⁵⁵⁾「奇妙な物音」に気付いて、「老人達の幾人かが頬の内側を吸って、この奇妙な舌打ちに似た音を洩すのだと推察した。⁽⁵⁶⁾ 明け方には「老人達のひとりが眼を覚まして、ひどく咳き込んだ。彼は大きな、格子縞のハンケチに痰を吐いた。ひとつひとつ、咽喉からもぎとるように。」そして部屋を出るとき老人達は「この苦しい通夜のお蔭で、灰のような顔色をしていた。⁽⁵⁷⁾」

老人達の身体 (corps) は内面性をまったく剝奪されて物体 (corps) として対象化されている。心の窓としての眼は「鈍い光」に過ぎない。彼等は「太鼓腹」であり、「奇妙な物音」であり、「痰」そのものなのだ。

老いというものがどれほどにまで人間の身体を変形しうるものであるかということにムルソオは驚愕している。だがこの場面の意味するところはそれに止まらない。ここでの彼の姿勢には防衛的なところがあり、その知覚による対象構成には被害妄想的な色彩が濃厚にあり、それは不快刺激が昂まった環界からの情愛的関与の撤去とそれと並行して起る解離した生の攻撃性の顕在化を理由とすると前節で述べておいた。ここでは更に、その理由を老化した身体、死を

伝播する身体に対してその媒体となる己が身体をつまりは心を閉ざそうとする態度にも求められよう。だからこそ老人達の首を振る動作も「挨拶なのかそれとも筋肉の痙攣なのか、僕には分らなかった」⁽⁵⁸⁾と彼は言うのである。

又、老人達の老醜を苛責なく照し出すものは、確かに先ず「眼が眩む光」であるが、しかし「僕の前に、影はひとつもなく、どの物体も、角も、すべての曲線も、眼を傷つける明確さで描き出されていた」⁽⁵⁹⁾という全体的に禍々しい雰囲気の中の老人達を「注視」し「何ひとつ見逃さなかった」のはムルソオの攻撃的な眼差しなのである。この眼差しが、前節でみたように、老人達を生ける屍、身体 = 死体 (corps) にまで還元するに至るのである。生ける屍というイメージは一方では増々彼の心中に潜む死の不安を掻き立てずにはおかないが、他方では又自分の「若い」身体をそれとの対照によって引き立たせもするのである。己が若さの強調を以て老いに対する防衛としようとするのである。

ムルソオは又養老院の在院者のひとりであるペレの異様な外貌に、その「奇妙な」身体に仮借ない視線を浴びせる。「唇は面皸がいくつもできた鼻の下で慄えていた。細いきれいな白髪の間から突き出している、無格好に弛んだ奇妙な耳の、血のような赤色が、蒼白な顔との対比で、僕を驚かせた。」⁽⁶⁰⁾この老醜を極める身体を毒々しく彩るものは「血のような赤色」と「蒼白」とである。それは死に刻々侵蝕されつつある身体と言ってよいだろう。ペレは霊柩車の「傍に」居て、はやくも死神に憑かれているようでもある。ムルソオは己が身に漂い寄せる死の気配を振り払い死の不安から逃れるために、ペレを死の生贄に仕立て上げようとするのである。併せて、死は人間の現実ではないかのように茶化されなければならない。だから霊柩車は彼の眼には「塗りたてで、長方形にびかびかして、筆入れを思わせ」⁽⁶¹⁾るものに映ることになる。

葬行の過程でムルソオの心中において生の攻撃性が次第に解離し頭在化してくると前節で指摘し、その理由をやはり外界からの不快刺激の過剰と「不眠の一夜の疲労」⁽⁶²⁾に求めたのであった。ここでは更に、死の不安にもその理由を求めることができる。死の不安が暮るにつれ外界は己が身体を脅かすものと映

じ、恐怖から破壊的攻撃性が生じてくるのである。葬列が動き出すと、ムルソオは「ペレが軽くびっこをひくの気付いた。」そのせいでペレは葬列から遅れるが、何度もムルソオは振り返ってペレの姿を確認する。「曲り角で彼は僕らに追いついた。それから又いなくなった。又野原の横断をやり、それを数回繰り返した。⁽⁶³⁾」ムルソオがペレを幾度も振り向いて見るのは母の「許婚」⁽⁶⁴⁾に即ち親和的世界の住人のひとりに寄せる関心の故であると第一章では述べたが、その親和的感情と相反感情併存的な (ambivalent) 関係にある隠れ潜む敵意の存在をもここに確認しないわけにはいくまい。死の不安によって掻き立てられた敵対的攻撃衝動は外界に投影されてその結果知覚は外界を被害妄想的に対象構成するが、そのとき外界から襲来するものと想像される攻撃を自分の身替りの上に向けさせて自らは死の不安を免れようとするのである。それ故ペレの顔は「破壊された顔」⁽⁶⁵⁾であると、その気絶する姿は「まるで壊れた操り人形のようなだった」と表象されるのである。それは完膚なきまでに物体 = 死体 (corps) に還元された身体 (corps) の表象である。こうして死は「若い」自分をではなく、確実に老いたペレこそを襲うものとムルソオに確信される。同時に死は巧妙に隠蔽されてもいる。というのも「壊れた」のは「操り人形」のような身体 = 物体であると表象されているからだ。生命の脱け殻には死はなく、物体の解体があるのみである。ムルソオはこのような心の絡繰りによって自らの死の不安から逃れるのである。

ムルソオの非情な眼差しの前に、サラマノとその飼犬もその老醜を余す所なく曝け出す。「スペイン犬は湿疹らしい皮膚病に患っていて、そのために毛がまったく抜け落ちて、全身が褐色の瘡蓋と斑に蔽われていた。〔……〕サラマノ老人は犬に似てしまった。彼の顔には赤味を帯びた瘡蓋があり、毛は黄色くて疎らだった。⁽⁶⁶⁾」飼犬は「こん畜生 (salaud) ! 碌でなしめ (charogne)」⁽⁶⁷⁾と老人に罵られる。飼犬を見失った老人が訪ねて来ると、ムルソオは老人が「靴の先を見詰めて、瘡蓋だらけの両手を慄わせていた」⁽⁶⁸⁾のを観察する。飼犬の失踪が明白となったとき老人は再びムルソオを訪れ、ムルソオの母の死に言及し

た後、「知り合ってから初めてのことだが、彼はそっと手を差し出し、僕は彼の皮膚の鱗を感じた。⁽⁶⁹⁾」

これまでに挙げた例によってもムルソオが他者の身体の老化の徴候をいかに敏感に察知し、いかに執拗に観察するか、又それがどれほど老いと死への不安のなせる業であるかは明らかである。この場合においても同じことが確認される。「知り合ってから初めての」の握手に、相手の手の「皮膚の鱗を感じた」とムルソオは言う。恰も彼の「若い」皮膚が老いの表徴の「鱗」に触れることによって皮膚の角質化に感染することを恐れているかのようである。サラマノは確かに飼犬と「一つの部屋にたった二人だけで」暮していたから、自分から「手を差し出」すのはこれが「初めてのこと」かもしれない。しかし逆にまた、ムルソオの方が老いた身体に触れることを忌避してこれまで自ら「手を差し出」そうとはしなかったのだとも言えるのである。

サラマノと飼犬の挿話の意味するところはこれに止まらない。前章第2項『サラマノとその飼犬』で両者の関係をムルソオとその母の関係と対比して扱ったが、この二つの対関係の間には確かに「平行関係」(parallélisme)⁽⁷¹⁾があると思われる。ムルソオが母を養老院に入れたのは「三年前」⁽⁷²⁾のことであり、サラマノの飼犬が野犬収容所に保護されているとすれば「適当に処分」されるまでの日数は「三日間」⁽⁷³⁾である。この数字の暗号によって、『異邦人』全体に互って様々な水準において織り込まれている「平行関係」⁽⁷⁴⁾の一つがここに存在することを作者カミュ自ら示唆しているのだと考えてよいだろう。

ムルソオもまた母と「二人だけで一緒に」暮していたのであり、文字通り「同じ種族」なのであり、「互いに憎み合っていた」⁽⁷⁵⁾少なくともその可能性はあったということは彼自ら「すべて健康な人間は、自分の愛する者の死を多少とも希った筈だ」と言っていることから推察されるのである。母へのこの憎悪の原因の一つとして、母の身体の日々頭わになる老化が挙げられよう。ムルソオも又その心中において母を「〔死に〕穢れた奴」(salaud)、「腐った死骸〔腐肉〕」(charogne)として忌避していたに違いない。そして「二人だけ」の暮し

のうちにサラマノ老人が飼犬に「似てしまった」ように自分も又母に似てしまい自分の身体が「腐肉」の臭いを漂わし出すことを、老人の飼犬のように急速に「老衰」にとりつかれることを恐れていたのだ。このようにムルソオは飼犬(母)に対するサラマノ(自分)の位置にあるが、別の観点からすると飼犬の立場にあるとも言える。老人が飼犬を見失ったのが「脱走王」を覬⁽⁷⁸⁾っていたときであるというのは意味深長である。飼犬は老人の「老衰」に感染することを忌避して「脱走」したのだとも言えるのである。何故なら「犬は人間より短命」⁽⁷⁹⁾であるとしても先に老いていたのは間違いなく老人の方であるからだ。こうした次第で、母を養老院に入れた理由の一つとして、ムルソオの抱く強い死の不安があったと思われるのである。

ムルソオの関心を惹く身体の異常は老化に限られるわけではない。犯行当日の朝レエモンの出立ちを見て「彼の前腕が真⁽⁸⁰⁾白で黒い毛に被われているのが、僕には少し嫌⁽⁸¹⁾だった」とムルソオは言う。「日に灼けた身体」こそ健康と生命の象徴なのであり、「黒い毛」によって強調される腕の「白」さは病的なもの⁽⁸²⁾と彼の眼には映じて嫌悪を唆ったのである。

海辺でアラブ人達と二度目に対決したとき、ムルソオは「笛を吹いている男の足の指がひどく開いているのに気付いた。」彼のこの注視の直前にレエモンが「小型のピストルに手を掛⁽⁸³⁾け」ている。又これに先立つ初回の格闘の折りにムルソオは流血を目の当りにしており、前節で指摘したようにそのとき既に彼のうちに生^{なま}の攻撃性が解離し浮上してきている。その折りには彼自身が格闘に加わる可能性も十分あったわけであるから、このときの破壊的攻撃衝動は死の不安と相即的であったわけである。ところが今問題にしている場面では、レエモンが「このまま撃⁽⁸⁴⁾つ」かも知れないのだから、死は今度は専らアラブ人の上に予感される。死の不安が自分の身の上からアラブ人へと転嫁されたわけである。従ってこのアラブ人の身体の異常を注視することによって、ムルソオはそこに死の兆を読みとろうとしているのである。アラブ人を死の生贄に仕立て上げることによって己が身の上から死の不安を祓おうとしているのである。彼

は確かに「ピストルを俺によこして、あいつとは男と男で〔素手で〕行け」と言って流血を回避するかに見えるが、しかしそれにつ續けて「もし仲間が手を出したら、短刀を抜いたらしたら、俺が殺っちまうから（je le descendrai）」⁽⁸⁵⁾と言う。前半分は彼持ち前の公正の精神に抛ろうとする意識の水準の発言であり、後半分の血腥い言葉を吐かせるものは無意識裡の血への渴きであり、死の生贄への期待なのである。

身体の異形は観念的なものでもありうる。『異邦人』(L'Etranger)と題されるこの物語の中で真実「他人」⁽⁸⁶⁾(étranger)と呼ばれるに価する者はアラブ人であろう。この物語の世界全体を一つの円に譬えると、ムルソオを中心としてヨーロッパ人入植者の登場人物達がこの円内を充たし、その周縁にアラブ人の登場人物達が位置していると言える。物語全体を通じて、アラブ人は五つの姿容の下に登場する。最初は養老院の霊安室に居る看護婦として、次にはレエモンの情婦として、三度目はこの情婦の兄を含むアラブ人の一団として、四度目はムルソオが逮捕直後拘置された雑居房の同囚達として、最後には刑務所の接見所に居合わせた囚人達とその面会人達として。

アラブ人の看護婦は終始無言であった。レエモンの情婦は「悲鳴をあげ」、⁽⁸⁷⁾「あたしを殴ったのよ。この男はヒモが商売なんです」⁽⁸⁸⁾と警察官に訴えるが、ムルソオと言葉を交すことはない。この女の兄はレエモンと電車の中で喧嘩して「男なら電車から降りろ」などと言うけれども、この言葉はレエモンが語り伝えているのであってムルソオが直接耳にしたわけではない。この男をムルソオは先ず「煙草屋の店先」⁽⁹⁰⁾で見掛け、次に浜辺で遭遇しこれを殺害するに至るのであるが、その間この男とその仲間のアラブ人達は終始一貫して一言も発しないし、声もたてない。最初の格闘の寸前にレエモンが自分の喧嘩の相手に「何か言った」⁽⁹¹⁾ことを除けば、ムルソオは勿論のことレエモンもマソンもアラブ人達に声を掛けない。雑居房のアラブ人の囚人達はムルソオを見ると「笑った。やがて何をしたのか尋ねた」が、ムルソオが「アラブ人をひとり殺したと言うと、彼らは沈黙してしまった。」⁽⁹²⁾これが物語全体に互ってただ一度だけムルソ

オとアラブ人が口を利き合う場面である。接見所では、ムルソオの側に「十人程の囚人が居た。大部分はアラブ人だった。」面会人のマリーは「モール人の女達に囲まれ、二人の女の面会人に挟まれていた。」マリーの両脇の「女の面会人」は「肥った女」と「小柄の老婆」であるが、わざわざ「モール人の女達」とは区別して言われているから、この二人の面会人とその相手の囚徒の「金髪の大男」と「小柄な青年」とはヨーロッパ人であるということになる。「大男」と「肥った女」はフランス語で話し、「小柄な青年」は一言だけだが別れ際に「さようなら、ママ」とフランス語で言う。言われた老婆が立ち去った後に「入れ違いに帽子を手にした男が入って来て、彼女の居た場所を占めた。ひとりの囚人が導かれてきて、二人は勢いよく喋り出した。」この「帽子を手にした男」と新たな「囚人」はヨーロッパ人であるかどうかははっきりしない。しかし、アラブ人とその家族の会話が「彼等は大声を出さなかった。騒がしさにも拘らず彼等はごく低い声で話を通じさせることができた。下方から発せられる彼等の小声の眩き (murmure sourd) は、彼等の頭上で交錯する会話に対して、言わば絶え間ない低音部を形造っていた」と評されているのに対し、この新たな面会人の男と囚人の男の話声については「低声 (demi-voix) だったが、それは部屋がまた静かになったせいだった」と言われており、前者のアラブ人達の「小声」は言わば本質的なものであるのに比し後者の「低声」は状況的なものであって両者その性質を異にしていることから、老婆と青年の一组に代ったこの二人の男もヨーロッパ人であると推定される。こうして「十人ほどの囚人」のうちムルソオとその両脇に立つ三人がヨーロッパ人とすると、「大部分はアラブ人」と言われうるにはこの三人のみがヨーロッパ人であったのであり、入れ替った男もヨーロッパ人と推定されムルソオの傍に位置するのであるから、ヨーロッパ人の少数の囚人とその面会人達が室内において孤立した「小島」を形成していたのであると言わなければならない。それは刑務所側の配慮によることかもしれないし、偶然のことかもしれない。だがムルソオの「観察」の射程範囲が自分の両脇のヨーロッパ人の囚人とその面会人達に限定され、ア

ラブ人の囚人とその面会人達はあくまで「低音部」に、囚に対する地の位置に留められていることを考えると、彼の関心のアラブ人に対するある種の閉鎖性を感じとらないわけにはいかないだろう。結局雑居房での簡単な言葉のやりとりをただ一つの例外として彼はアラブ人達と言葉を交さず、又その声音には注意を惹かれても会話の具体的な内容には関心を払っていないことが明らかであると言える。

アラブ人がムルソオの関心領野の周縁部に留められどこかよそよそしい特別扱いを受けているという印象を生ずるのは、彼等が言葉を与えられていないということにのみ因るのではない。ムルソオと後述するようにその母を除く他のヨーロッパ人の登場人物達は、先に瞥見したように、概してその外貌・服装・表情が詳細に観察されているが、アラブ人の登場人物達はその身体に具体的な外観を殆ど与えられていない。アラブ人の看護婦は、その服装については「白い上張り」と「派手な色のネッカチーフ」が言及されているが、顔に巻かれた「包帯」を理由にその容貌と表情は観察されていない。ただ、「鼻の頭でも包帯は平らになっていた」と言われていることから、「下疳」に鼻梁を損われていることが推察されるのみである。だが厳密に言えば、包帯は「目の下から顔の回りに」巻かれていたのであるから、頭を被うネッカチーフと包帯の間に覗く額と眼の形状・色合い・表情は「観察」されうる筈であるが、「顔で目につくのは包帯の白さだけだった」と語り手は言い切っている。彼は看護婦の風貌や表情、つまりその内面性に関心がないのである。

レエモンの情婦がレエモンから受けた虐待を警官に訴える場面に立ち会ったとき、女を誘き寄せる手紙を代作したことによってこの折檻に半ばの責任をもつムルソオは本来少なからぬ関心をこの女に示してよい筈であろう。にも拘らず語り手は女の言葉と身振りは伝えるが、その容姿・服装・表情には何の注意も払っていない。

犯行の日ムルソオは、アパートを出たところでこの女の兄のアラブ人が他のアラブ人達と一緒にいるところを見掛け、以降浜辺で三度出会うわけである

が、その肢体・服装・表情に言及することは殆どなく、あってもそれはアラブ人の風貌に何ほどの具体的なイメージを与えるものでもない。初めて「一団 (un groupe) のアラブ人」を見掛けたときのことをムルソオは次のように述べている。「彼等は黙って僕らを見詰めていた。彼等の流儀で、丁度石ころか枯木でもあるような見方だった。」跡を付けてくるかと振り返ると「彼等は相変わらず同じ場所に居て、僕等が出てきた場所を同じ無関心な様子で眺めていた。⁽¹⁰²⁾」この日の前にレエモンはムルソオに電話で、「一日中、別れた女の兄弟の混じっているアラブ人の一団に付けられていた。《もし家のそばでそいつを見掛けたら、知らしてほしいんだ》⁽¹⁰³⁾」と言ってきている。女に加えた暴行に対する報復を懸念しての頼みであることは明らかであり、ムルソオは初めて見る問題の女の兄に特別な関心を払って当然と思われるのであるが、「左から二番目が、問題の男だ⁽¹⁰⁴⁾」とレエモンに教えられながらとりたてて観察もせず、「問題の男」はあくまで「アラブ人の一団」の一員に留まっている。つまりムルソオの知覚はアラブ人をその個性においてではなく、先ず集合 (groupe) 性において対象構成し、そこに執着する傾きがあるということである。「彼等の流儀」という表現はこの事態を如実に示すものである。アラブ人達が、アラブ人あるいはモール人の女と呼ばれている⁽¹⁰⁵⁾のに比べ、ヨーロッパ人の登場人物達は決してヨーロッパ人とは呼ばれていないことは注意してよいことである。つまりヨーロッパ人入植者の世界は語り手にとって大気と同様に対象化されえないもの、自身の身内をなす世界そのものなのであり、内の世界なのであって、その外縁に「異邦人」(étranger) の、「見知らぬ者」・「他人」(étranger) のつまり外の世界があるのである。この日以前からレエモンの跡を付け回し、又この日はムルソオ達が出てくるのをわざわざ待ちうけていたのであるから、アラブ人達がムルソオ達に「無関心」なわけではないし、ただ「石ころか枯木でもあるように」見ていたわけでもないことは明らかであるが、ムルソオの心的世界の構成原理である内と外の区別が反省以前に働いた結果、アラブ人達は疎遠な「彼等」(Ils) に凝固し、表情の窺い知れない閉ざされた集団 (groupe) と彼の眼に

映ったのである。アラブ人達を個々の人格として表象させず、その実存を黙殺させる心理機制がムルソオの心の中にあるのだと考えてよいだろう。

浜辺で彼はこの「問題の男」とその仲間のもう一人のアラブ人とに出会う。二人の服装については「⁽¹⁰⁷⁾菜葉服」だけが言及されているが、これは身体を個別化するに足る衣服ではない。彼等の肢体・容貌・表情については一切言及がない。「問題の男」は、「頭突きを食わせそうな様子を示し」、擲られて「顔は血塗れになった」が刀でレエモンに切りつけた、とその挙動が呈示されるだけである。⁽¹⁰⁸⁾「血塗れ」の顔だけではなんらその表情を窺うことはできない。二度目の対決の場においても、この同じ二人の風貌に個性を与えるような観察は殆ど加えられていない。その服装には新たに「⁽¹⁰⁹⁾油染みた」という修飾語が付加されているが、これとても二人の衣服を同時にそう形容しているのであり、もともと「菜葉服」であってみれば当然予想される修飾語であって、彼等の服装は相変らず一般的な性格を帯びたままである。彼等の表情についても、「まったく穏やかな(calme)、ほとんど満足そうな様子だった」と言われるだけで、これではムルソオ自身が告発された「⁽¹¹⁰⁾平静」(calme)と変るところなく、それは却って内面を遮蔽する表情、掴み所のない表情である。ここで唯一の例外として、アラブ人の肢体の特徴の一つが、即ち「足の指がひどく開いている」事実が観察されているが、これも「笛を吹いている男」の足についての観察であって、レエモンの「仇」のアラブ人即ちムルソオに殺害されるアラブ人はその外貌を具体化するに足る特徴を相変らず指摘されていないのである。⁽¹¹²⁾独りで浜辺に戻ったムルソオはまたもこの「問題の男」に出喰す。相変らず「⁽¹¹³⁾菜葉服」が指摘され、それが「暑さの中で煙っていた」とだけ観察される。その表情については、「彼の半分閉じた瞼の間から、時々視線が覗えた」、⁽¹¹⁴⁾「多分顔の上の陰のせいで、彼は笑っているように見えた」と述べられるのみで、その表情の意味は確定されない。そして射殺されたアラブ人はただ「⁽¹¹⁵⁾身動きしない身体」(un corps inerte)と言われるにすぎず、その死体から人格は剝奪されている。それは確かに「ひとつの死体」(un corps)であるが、人格の残映が皆無であるこ

とからすれば、「或る不特定の物体」(un corps)とさえ言える。勿論ここで、ムルソオが死を他者に転嫁することによって自らの死の不安から逃れ、併せて犠牲者を「物体」として表象することによって死体から人間的現実としての死を否認し、かくして二重に死の不安を免れようとしていることは指摘しておくねばなるまい。

接見所のアラブ人達の外貌は全く呈示されることなく、マリーを囲む「モール人の女達」はただその存在が確認されるに止まっている。

問題が残るのは雑居房でムルソオが居合わすアラブ人達である。「逮捕された日、先ず最初僕はもう何人かが留置されている部屋に押し込められた。その大部分はアラブ人だった。彼等は僕を見て笑った。それから、何をしたのかと尋ねた。僕はアラブ人をひとり殺したと言った。すると彼等は沈黙してしまった。しかし間もなく夜になった。彼等は寢床にする筈をいかに扱うべきかを僕に説明した。端を巻くと、長枕になるのだった。一晚中、南京虫が、顔の上を走った。」⁽¹¹⁷⁾

恐らく『異邦人』全体に互っても、これほど単純に見えてしかもその意味内容を確定するとなるとこれほど困難を感じる挿話は他にあるまい。先述の如く、これが物語の始終を通じて唯一アラブ人とムルソオとが言葉を交す場面であるが、しかしそれも厳密に言うと、アラブ人の質問に対してムルソオが返答したというに止まっている。しかもここでもアラブ人は相変らずの「彼等」から一步も出ず個々の人格に分化するに至らない。その内面は量り難く、アラブ人がその「沈黙」によって何を意味しようとしたのか、主人公がそれをどう受けとめたか何も明らかには語られてはいない。

先ず語り手が語り伝える限りの資料に拠って、この場面におけるアラブ人の心理を推し量ってみよう。アラブ人がムルソオを見て「笑った」のは同じ境遇に陥った者同士の間に関わり親近感からだろう。「何をしたのか」と尋ねたのは新参の者への好奇心からと、どじを踏んだ訳など聞き出して退屈凌ぎにしようとしたからだろう。このときの彼等の気持では民族的差異の意識よりも同類意

識や好奇心の方が勝っていたのである。ところが「ひとりのアラブ人を殺した」という冷水を浴びせるような返答をうけて、彼等の同類意識も馴れ馴れしい感情も消し飛んでしまい、彼等がそこに見たのは被害者を「アラブ人」と言うことによって自らをヨーロッパ人として立てつつ彼等から身を隔て、しかも同囚の「大部分がアラブ人」の所でそうした答えを何の臆する色も悪びれるところも見せずあっさりと言ったのけ、後はそれなり口を噤んでしまい恬として「平静」を保っている「奇妙⁽¹¹⁸⁾」な男である。この男の態度には民族的偏見は微塵も窺えず、そうした偏見に由来する威丈高なところも逆の怯えといったものも毛ほども認められず、隠し立てするところなくまったく公正であろうとする。それで胸襟を開いているかというところでもなく、問われる限りで答えただけで自ら進んでは対話も親交も求めようとはしない。この男は「怪物⁽¹¹⁹⁾」か狂人か、ともかく「未だ経験したことのないもの」(étranger)であってその胸中が量り難い。従ってアラブ人の「沈黙」はこの男の不用意な答えによって煽られた民族意識に基づく敵対的感情や内的葛藤に因るといふより、むしろこの男の態度全体が不可解に見えたことに因るのである。こうして彼等が寢床の造り方を教えるのは、植民地支配者に威圧された原住民の卑屈な従順さによるのではなく、自分達の同朋を殺したと言いながら、いかにも「無罪(innocent)」「(無邪気)」、更に語源的な意味では「無害」に見えるこの男に対して悪感情を抱く術がなかったからである、とひとまずは解釈しえよう。

逆に今度はこの場面でのムルソオの心中を窺ってみよう。彼はせっかく「笑っ」て愛想を示してきたアラブ人達に対して何故「アラブ人をひとり(un Arabe)殺した」と言ったのか。それはアラブ人の民族意識を徒に刺激するばかりで、「大部分がアラブ人」の牢内では、暴力の直接的行使はともかく少なくとも有形無形の「意地悪⁽¹²¹⁾」は避け難いと考えるのが普通だろう。仮にこのような答えをするにしても、彼がヨーロッパ人の登場人物達にはしばしば見せた「弁解⁽¹²²⁾」を、例えば「太陽のせいだ⁽¹²³⁾」といった類のことを言い足すのが賢明だったろう。だがもっと簡単に、別の折りに彼自身の念頭に浮かんだ通りに「ひとり

の男 (un homme) を殺した⁽¹²⁴⁾』と言った方がよかつたろう。とりわけもし彼の側に民族的偏見に由来する優越感とか敵愾心あるいは逆に恐怖心といったものがあれば一層のこと、予測される危険を考慮してそう言ったことだろう。しかし実際には、彼はなんのためらうところも見せず「アラブ人をひとり殺した」と言い、そこにどんな釈明の必要も認めなかったのである。

「大体、傍若無人、冷酷無比という場合も、潜在的には脅威を感じており、それで反動的に余計にそのような態度に出るのであると解することも可能である」という見方に立って、ムルソオの平静な態度は「見知らぬ他人」に対する「無視ないし無遠慮」であり、その異民族としての「見知らぬ他人」が「脅威」となって「人を食った態度」が増長され、「逆に相手を威圧しようとしているのだ⁽¹²⁵⁾」と解釈することもできる。確かに彼の態度は「傍若無人」と見えるのだが、しかしもしそこにあからさまに「脅威」と「威圧」の構えが見てとられるとすれば、それは必ずアラブ人の反発を買い、その「沈黙」には鬱屈した情念が濃みその寝床の造り方を教える仕方にも屈折した心理の重苦しさがあることだろうし、語り手は又そうした気配を無視することはできなかつたろう。

恐らく問題の根はもっと深いのである。その根を究めるにあたって注目されるのは、アラブ人の登場人物達と主人公との間には物語を終始一貫していかなる敵対的あるいは葛藤の関係も存在しない、少なくとも主人公 = 語り手の眼にはそのように映っているということである。看護婦はムルソオに「背を向けて⁽¹²⁶⁾」彼に何の関心も示さず、彼も「下疳」という門番の言葉に注意を喚起されて看護婦に観察を加えたに過ぎない。レエモンは情婦を誘き出す手紙の代作はしたが、女が「モール人の女」であることに気付いたのは代作を承諾した後のことである。女への暴行を黙認したが、それは女の「裏切り」を「罰する」⁽¹²⁷⁾ためだと知っていたからで、特にこの女がアラブ人だったからではないと言うこともできる。警察での「証言」は確かに女には不利に働くものだったが、それを承知したのは「⁽¹²⁸⁾どうでもいいことだった⁽¹²⁹⁾」がレエモンのたつての頼みであったからだし、女が「⁽¹³⁰⁾礼を失した」という証言内容もレエモンの話が真実とする

と事実を述べたに過ぎないことになる。結局ムルソオはこの女になんの含むところもなかったのだと言える。彼はこの女の兄を殺害するに至るが、この男が「憎んでいたのは」⁽¹³¹⁾レエモンであり、ムルソオが「海岸に居たのは偶然の結果」⁽¹³²⁾であり、「殺す意思」はなく、武器を持って泉に戻ったのは「偶然」⁽¹³³⁾であり、アラブ人の方にも敵意は認められず「笑っているように見えた」⁽¹³⁴⁾し、犯行は「太陽のせいだ」⁽¹³⁵⁾し、しかもムルソオを襲い彼が撃ったのは「燃える剣」⁽¹³⁶⁾であってアラブ人ですらなく、従ってそこに彼が「後悔」⁽¹³⁷⁾を覚えることもないのである。接見所のアラブ人達は「低音部」に過ぎなかった。

このような主人公とアラブ人相互の間の無関心と敵対的感情の欠如を背景として、雑居房の場面を再考してみよう。語り手がこの場面によって象徴的に示そうとしている思想は、結局次のようなものであろう。自分とアラブ人とは縁もゆかりもなく、又そこには特に親和的な感情もないがさりとて敵対的な感情もない。従って自分は相手の感情を気遣ったり臆したりする理由もないので事実を有り態に言えるし、アラブ人の方もこちらの底意の無さを汲んでくれて怨恨も抱かず同囚の誼み程度の親切を示してくれるのである。ただそれだけのことで、自分とアラブ人との間には偶々同宿した他所者同士の隔てつつ結ぶ親和的關係、つまり「優しい無関心」⁽¹³⁸⁾があるだけなのであると。

しかし、とここで読者は異議を唱えざるを得ない。裁判長に倣って、果たして「被害者は」ムルソオを「憎む理由がなかったか」⁽¹³⁹⁾と問わざるを得ない。手紙の代作の件はともかく、警察での証言は被害者のアラブ人に知られていないわけではないだろう。フランス語を解するこのアラブ人は、最初の格闘の寸前にレエモンが「お前は誰か他のが出てきたらそいつを任すよ」とムルソオに言い、ムルソオが「よし」⁽¹⁴¹⁾と答えたのを聞き取ったかもしれないし、未だ遠過ぎて彼の耳にまで達しなかったとしても気配でそれと察したことであろう。更に、二度目の対決のときは目と鼻の先で対峙していたわけであるから、ムルソオの「俺が殺っちまうから」⁽¹⁴²⁾という言葉ははっきりと聞いた筈で、これでアラブ人がムルソオをレエモンの「相棒」⁽¹⁴³⁾(complice)と見做さず、レエモンを「憎

んでいた」ようにムルソオを憎まなかったらおかしい。だがアラブ人以外の登場人物、例えば社長の心理の機微は鋭敏に感知するムルソオがこうしたアラブ人の心理にはまったく頓着するところがないのである。

たとえ消極的な意味合いにおいてであるとしてもアラブ人の犠牲者とその妹がレエモンとの間では互いに言葉を交し感情を表出し合う内面的な係わりをもちうる存在として現われているのに対し、ムルソオに対して立ち現われるアラブ人の抽象性、その内面性の欠落は異常な事態に思われる。結局ムルソオがアラブ人との間に保持していると暗黙のうちに主張する相互の「優しい無関心」を介しての関係は、ムルソオによるアラブ人の内面性の否認の、そしてそれに対応する、アラブ人に係わる限りでの自らの内面性の否認の所産であり、主観的幻想であると言わざるを得ないのである。それではこの語られざる、無意識の心理機制によって隠蔽されている両者の間の内面的係わりの現実とは何であったのか。

『異邦人』はフランスの植民地時代のアルジェリアを舞台にしている。そうした歴史的現実を想起させる虞のある言及は極力避けられてはいるが、語り手のヨーロッパ人ムルソオが原住民を「アラブ人」と一括して呼んでいる事実一つによっても、作品の理解に当たって植民地アルジェリアという舞台背景を度外視するわけにはいかないだろう。

作者カミュが育った当時の、そして作者の意図如何に拘らず『異邦人』の舞台背景として活かされている「アルジェリアは、公式には植民地ではなく、三つの海外行政区からなるフランス共和国の完全な一部をなしていた。だが、その歴史と生活の現実とは、植民地的経験に属していたのである。〔……〕その土地の住民たちは、種々雑多の少数のヨーロッパ人——彼らにとってフランスの一部を形づくるといふ考えはある種の現実性を帯びていた——と、アラビア語を話し、回教を信仰する多数のアラブ人とバーバル人から構成されていた。彼らにとっては、フランス共和国の一部を形づくるといふことは、現実性を帯びては⁽¹⁴⁴⁾いなかった。」

入植者と原住民は互いに植民地アルジェリアという同一の行政区に属し、フランス本国の人間から見れば同じアルジェリア人という下層のカーストに属し、又同じ土地に育つという体験を共有している。他方、入植者はたかだか数代を経たぐらいのことでは「お客様」(étranger)に過ぎないが、その上昇志向からしてアルジェリアがフランスのアルジェリアであり更にフランスそのものであることを望んで原住民を舞台の隅に押し遣ろうとするだろうし、原住民は入植者さえ居なければ被植民者という屈辱を味わわずに済むわけであるからアラブのアルジェリアを暗々裡にも主張せざるを得ないだろう。こうしてヨーロッパ人入植者と原住民との間には近親関係に見られる親和と敵対の相反感情併存(ambivalence)の存在が想定されるのである。勿論こうした図式はすべて疎略の誇りを免れず、当時のアルジェリアの社会情勢一般に即さず、ほんの一部の人々の精神状態を説明するに過ぎないということもありうる。ただその場合にもこうした事態が一部にはあり得ただろうとは言えようし、そして少なくともムルソオの場合にはそうした内的葛藤を想定した方が彼のアラブ人に係わる言動を理解するのに好都合であると思われるのである。

自覚されざるこうした内的葛藤をムルソオの内に想定すると、原住民のアラブ人は入植者の子ムルソオの否定的分身であり影であると言えることになる。この影の現実性を認めることはそれを落した本体の現実を認めることになるから、ムルソオはアラブ人を飽く迄疎遠な「彼等」に押し留めて個々の人格に分化することを妨げ、その外観で人格の存在を想起させる惧れのある一切の特徴を知覚から排除し、そうすることによって自分と「彼等」との間における日常的な人間的関係の可能性をすべて断ち、かくして初めて縁もゆかりもない「他人」(étranger) 同士の「優しい無関心」の、隔てつつ結ぶ親和的關係の幻想に安んずることができるのであると言える。従って、丁度アラブ人達の「石ころか枯木」でも眺めるような「無関心な様子」に報復への情念が秘められていたように、ムルソオのアラブ人に示す「無関心な様子」の底深くには親和と敵対の葛藤的情念が潜んでいたたのであり、そしてまたムルソオがアラブ人の心中に

彼を対象とする敵意の存在を否認しているのに対応して、アラブ人を対象とする自身の敵意も心中深く抑圧していたのであると言えるのである。

アラブ人がムルソオの影であるということは、単に入植者の葛藤的情念がアラブ人に投影されているということだけを意味しているわけではない。「人が自分の身体に不安を抱く限り、自分の身体が潜在的に何かどうにもならない方法で変化したり変形したりする可能性を暗示するような異質の身体に出会うたびに、防衛的な反応をひき起さざるを得ないであろう⁽¹⁴⁵⁾」と言われる。この「不安」が強ければ当然その「防衛的⁽¹⁴⁵⁾反応」も強まろう。ムルソオが心気症者に似て自分の身体を「劣った身体」と感じていることは既に推定されたところであり、身体に障害のある者(ペレ)・奇形(アラブ人)・「顔形の崩れた人」(看護婦)・「老人」⁽¹⁴⁷⁾(養老院の老人達、サラマノ)・「肌色の違い」⁽¹⁴⁸⁾(レエモン)といった「異質の身体」に対する彼の「防衛的」な態度についても既に確認されたところである。

この「『異種』の身体表面をもつことの恐れは、他の人種に対する態度に⁽¹⁴⁹⁾」も現われると言われる。既述のようにアラブ人の身体的外観で特異な点と言えば他の登場人物の誰も身につけていない「菜葉服」と「彼等の流儀」の「無関心」な眼差しだけであって、そうした特異性は例えば肌の色というような客観的に判然とした特徴とは類を異にする。それにムルソオの「日に灼けた身体」への好みからすれば彼にとってはアラブ人の肌の色も人種的乃至民族的差異の指標とはならない。結局彼の「人種偏見」⁽¹⁵⁰⁾は事実上のあれこれの身体的異質性の発見に発するのではなく、むしろその淵源は観念的なものであって、そこから逆に「異種」の身体を空想しこれが不安な身体意識を刺激するのだと言える。このアラブ人の身体を「異種」の身体としてムルソオに表象させる観念的淵源とは何か。

「ある人が『異種』の身体に対して抱く敵対心の強烈さは、ある程度、その人が否定的な支配〔的〕感情をどれほど相手の身体に押しつける必要があるかの関数である。〔……〕すなわち、自分が自己批判や自己攻撃を含む感情や妄

想を多くもっていればいるほど、自分以外の落伍者を見つけることが、その人にとっていっそう重要なことになるのである⁽¹⁵¹⁾』と言えるならば、「劣った身体」の意識が推定され、入植者の子としての「否定的な支配〔的〕感情」の存在が想定されるムルソオはアラブ人を「落伍者」に仕立て上げるに十分な資格を備えていることになる。更に、この段階では未だ単なる臆測に止まるが、これらの否定的自己評価がむしろその派生物でしかないかもしれぬほどに根本的な「自己批判や自己攻撃を含む感情」を彼の心中に想定することも可能であろう。こうした観念的淵源に根差す「人種偏見」に動機付けられた彼の眼差しは、客観的な特徴を見出すことによってではなく逆に能う限り対象の身体から特徴的なものを排除することによって逆説的にその「異種」性を際立たせようとするのであると言えよう。

こうしてアラブ人がムルソオにとって親密（「優しい」）で且つ疎遠（「無関心」）な存在であることの意味が一層明らかになってきた。先ずムルソオはアラブ人に「自分の身体や心理的自我〔自己像〕について抱いている汚れとか嫌悪感情のすべて」を「投影」しており、そこからアラブ人に対する「否定的な見方」⁽¹⁵²⁾つまり疎隔感が生ずるのであり、同時にアラブ人はこのとき「自己の内なる姿が『外部に』表われた形」と言え、そこから「密接な身体的親密さをもつという妄想」⁽¹⁵³⁾つまり親和的な牽引力が生ずるのである。かくしてアラブ人はムルソオにとって「遠ざけようとする」にも拘らず「奇妙な親密さと身近さをもった対象」⁽¹⁵⁴⁾として現われてこざるを得ないことになる。だがムルソオの場合、アラブ人に対するこうした相反感情併存は意識されていない。それは既に述べたように、彼が自己の影としての限りににおいてアラブ人を否認していることによるのであるが、もう一つ別の心理的な絡繰りがここには働いているのである。

異人種・異民族の身体を遠ざけるために人は一般に「『自分に似ていない、人種的に劣った』身体」⁽¹⁵⁵⁾という神話を必要とする。特異な身体的特徴が現実にあるうとなかろうと、異種の身体は不潔で邪悪で劣等な身体とされる。だが

ここに奇妙な逆説が生ずる。例えば、「黒人の身体に対する」白人の「特別な
アンビヴァレンス
両面感情」つまり「黒い肌をしたこの創造物は、黒く劣悪なものであると同時に、驚くほどすぐれたところがあって、むしろ妬まれるほどである」という「妄
(156)
想」が観察されるのである。侮蔑と嫌悪の対象が同時に恐怖と驚嘆の的になるのである。この場合、対象を眺める主体の意識において、対象に投影されていたもとの否定的内容は消去されてしまい、ただ結果としての理想化された側面のみが残るということもある筈である。実際そうすることによって主体は対象に抱く自己の「両面感情」を直視しないで済む。対象のもつ生々しい「親密さと身近さ」は心的葛藤を惹起するものであったが、その裏付けをなしていた妄想的内容が主体の意識から排除されることによって、それはより一般的な淡い性格のものとなるし、理想化の作業のうちに主体は対象との親和性を幻想しつつ言わば対象を敬して遠ざけることができるのである。

翻って『異邦人』においてムルソオに対して立ち現われる限りのアラブ人の姿を見るならば、具体的な特徴を捨象された身体の無言の挙措を以てその所在を証している様は影絵を思わせる。影絵のように日常生活の舞台には無縁でその「現実性を信じにくく⁽¹⁵⁷⁾、同時に人を魅惑して止まない夢幻的な存在である。その個性性を奪われた不定の「或る身体」(un corps)とは「なんの意味も持たない⁽¹⁵⁸⁾」無用の身体であると同時に、その限定の無さ故に非の打ち所の無い、理想的な身体とも言えるのである。

この理想化のスポット・ライトは対象の一面を近寄り難い光芒のうちに浮かび上らせると同時に残された面を闇のうちに落すのである。この闇に隠された部分にはムルソオの否定的な自己像が投影されており、この闇に凝むものが多いほどその秘められた「親密さ」は増すわけであり、その反照が対象の可視的な部分に弥増さる磁力を帯びさせ不可思議な実在感を与えるのである。

この闇に凝むものの中には、これまでに明らかになったムルソオの様々な否定的自己感情があるわけであるが、それとともに、少なくともそのうちの「劣った身体」の意識と相関的な死の不安も又そこにあることになる。そして丁度

「眼も眩む光の中」の「影はひとつもな」い霊安室の光景がその背景に広がる見えざる死の影との対照によってその「眼を傷つける」⁽¹⁵⁹⁾禍々しい光輝を増すように、アラブ人の具体性を捨象された身体つまり陰影を排除された光輝く身体は、その背部に否認された見えざる死の不安を潜めることによってその表の光暈の不吉な煌めきを増すのである。こうしてアラブ人の身体はその内に死の不安が秘められていることによってムルソオの心中に定かならぬ無気味な不安を、そしてそれ故にこの身体を「遠ざけようとする」心理的反応を喚起するのであるが、同時にその表の妖しい輝きによって彼を眩惑し惹きつけもするのである。⁽¹⁶⁰⁾

更に、ムルソオの死の不安が徹底して抑圧されるときはまたアラブ人の身体が徹底して抽象化されることである。否認された死を潜めることによって呪縛力を帯びたアラブ人の身体からムルソオは〔死への意識されざる〕不安の故に遠ざかろうとし又〔死への意識されざる〕願望の故にそこに魅入られもしたのであったが、「汗と太陽を振り払っ」て見ればそれも今や「身動きしない身体」(un corps inerte)に、不定の「或る生氣なき物体」(un corps inerte)に過ぎない。それは非歴史的な「生命的身体」の裏返し姿と言える。「生氣なき物体」には勿論歴史性はないし、従って死もない。丁度死の観念が未だ成立していない子供にとって死んでいるものとは「動かない物」⁽¹⁶¹⁾のことであるように、ムルソオはアラブ人の身体が動かないかどうか確かめるために、「間を置い」⁽¹⁶³⁾て撃ったとも言えるのである。

「死者が個別的に認識されない場合には、無関心しかないし、〔死臭は〕単なる悪臭でしかない。」⁽¹⁶⁴⁾ムルソオの知覚が捉えた被害者の身体は個性性とは無縁の「動かない物」に過ぎず、従って「後悔」⁽¹⁶⁵⁾を抱く必要もないことになる。だがここでの真の問題は後悔の有無ではなくして、対象の個性性を否認することによって対象の死を否認していることである。この心理的操作の目差すところは、「死の恐怖は、自己の個性性の喪失にたいする情動であり、感情であり、意識なのだ」⁽¹⁶⁶⁾から、自己の死の可能性を証すものとしての対象(アラブ人)の

個性とその喪失としての死を否認することによって自己の個性とその喪失としての死を否認することなのである。何故なら対象の死の否認が対象の個性の否認によってのみ可能であると同様に自己の死の否認は自己の個性の否認によってのみ可能となるであろうから。この個性の否認は忘我状態によって可能となる。ムルソオの場合この状態は心理的退行によってもたらされたと考えられる。「子供が死に関わりを持ってると自ら感ずるのは、彼が個性としての自己を意識するまさにその瞬間からなのである」⁽¹⁶⁷⁾とすると、犯行直後のムルソオの心理にこの「瞬間」以前への退行が防衛機制として成立したのである。極度の死の不安の頭在化に対して無意識裡に成立した防衛機制であるが故に、常態に復した後のムルソオの意識にとって犠牲者の死は不可解な謎であり、「困惑」⁽¹⁶⁸⁾を覚えるばかりなのである。

C. 生命的身体

ムルソオの知覚が結ぶ身体の抽象的イメージは、アラブ人の影絵的な身体＝物体に確認されるばかりではない。前章の『マリーとムルソオ』の項で指摘したように、マリーはムルソオにとって結局のところ官能的世界の置換可能な無名の一存在者にすぎず、彼女がそこに留まり得たのはムルソオの知覚が彼女の身体を個性的なものにする具体的特徴を予め能う限り排除して対象構成していたからである。既述のようにマリーの身体は殆どの場合視覚印象によってのみ呈示されているが、そのスナップ・ショットを一覧して読者がもちうるマリーの身体イメージは、「日に焼けて褐色の顔は花のようだった」⁽¹⁶⁹⁾というステレオタイプなイメージに集約されると思われる。ムルソオにとって彼女は畢竟するに官能的で健康な生命を象徴するものであり、「生命的身体」の一範例に止まるのである。従ってこの身体は他の生命的身体と置き換え可能ということになるので、「別の女」との結婚も「もちろん」可能だとか、他の女達もマリーと同程度に「美しかった」⁽¹⁷⁰⁾とか、独房で「決してマリーのことを特別考えたわけではなかった」⁽¹⁷¹⁾などというムルソオの言葉も了解しうるものとなる。このよう

なマリーの身体からの個性性の捨象が究まるところは、一方においては「歯の輝きと眼の小皺⁽¹⁷²⁾」という生命的身体のこの上なく非個人的な一標識への単純化であり、他方では前節で述べたような「いまは離されてしまった二つの身体⁽¹⁷³⁾」のほか、僕らを結びつけていたものは何もない」とする身体=死体=物体 (corps) への還元なのである。

勿論マリーは、これも前章で述べたように、様々な身振りや表情とりわけ言葉によって官能的身体に限定された自己に内面性という次元を付与しようとする、つまり個性性を勝ち得ようとする。語り手はマリーの「大変驚いた様子⁽¹⁷⁴⁾」、「悲しそうな様子⁽¹⁷⁵⁾」、「僕を非難するような様子⁽¹⁷⁶⁾」、「ひどく蒼ざめていた」こと、「相変らずの引き裂かれ壘撃したような微笑 (le même sourire)⁽¹⁷⁷⁾」、「不安そうな小さな合図⁽¹⁷⁸⁾」、「ひどく苛立っているように見えた」こと、「ほとんど抑揚のない声⁽¹⁷⁹⁾」、「声を上げて泣き出した」こと、「微笑している一寸不安そうな彼女の顔⁽¹⁸⁰⁾」を観察する。しかしこれら様々に現われる表情の変化も「相変らずの〔同一の〕微笑⁽¹⁸¹⁾」を浮かべ、笑っているマリーという画一的なイメージの頻出によって打ち消されてしまうのである。⁽¹⁸⁴⁾

マリーは言葉を介してムルソオとの関係を具体化し自己の身体に個性性を付与しようとするが、すべて成功しない。そしてムルソオの記憶のうちでマリーが個性性を回復する方途も封じられている。彼が獄中で回想するマリーとは、その「衣服と笑い⁽¹⁸⁵⁾」にすぎず、「太陽の色と欲情の焰を備えて」いる「ひとつの顔⁽¹⁸⁶⁾」にすぎない。結局彼はマリーがその個性性を蘇生するに至りうる回路のすべてを予め遮断しておいたのだと言うことができよう。

マリーの履歴で読者が知りうることといえば、ムルソオと「同じ職場の元タイピスト⁽¹⁸⁷⁾」であったことと、「叔母⁽¹⁸⁸⁾」がいることだけである。その年齢も現在の職場も住所も人間関係も一切読者は知ることができない。何故なら、ムルソオがそうしたことを「思いつかなかった⁽¹⁸⁹⁾」からである。彼はマリーの個性性を否認すべく彼女の生活の具体的詳細への関心を無意識裡に排除していたのだと言うことができよう。

更に、ムルソオが自身とマリーを「二つの身体」(deux corps)と表象しているように、彼女が置き換え可能な生命的身体として個性性を否認されるのと相即的に彼もまた自らの眼には一つの身体に過ぎないものと映じて個性性を捨象されるが故に置き換え可能な存在となり、マリーの新しい恋人として「もうひとりの新しいムルソオ」⁽¹⁹⁰⁾(un nouveau Meursault)が表象されるに至るのである。

歴史を有する身体のみが死を有するのであるから、このような自他の身体からの歴史性の排除は死の不安のなせる業であると言える。マリーはムルソオにとって一点の死の翳りもない理想化された躍動的な生命と健康な性愛の象徴なのである。その「太陽の色と欲情の焰」に巻かれることによって死の穢れを浄め死の不安を払い除けようとムルソオはするのである。

D. 共生的身体

抽象的身体を付与されている者は主人公・犠牲者アラブ人・マリーの三者に止まらない。『異邦人』のなかで主人公に次ぐ重要な位置を占める登場人物でありながら主人公以上にその身体から具体的特徴が剝奪されている人物がある。それはムルソオの母である。

前章において明らかになったところでは、ムルソオは死んだ母と対面しようとしなかった、つまり死体としてにしろ母の身体について具体的表象を得る最後の機会を自ら拒んだ。又彼が母の「正確な年齢は知らなかった」⁽¹⁹¹⁾ことに象徴されているように、彼の記憶のうちにおいても具体的な身体を備えた日常生活存在としての母の映像は再現することなく、結局彼の母は彼の心象世界においてかつて・か・しこにあった生の痕跡を殆ど残さず、固有の歴史も、又固有の身体も持たずに終わった。一方でのこの現身の母の不在という事実と対照的に、他方では物語の全章に亙って母が登場するという死せる母の遍在が、しかも知恵としてのその特異な存在様態が注目された。更に、死せる母は次第にムルソオの全的な共感の対象となり、遂に両者は相似て区別し難いものとなる。「死を間近にしたママは、そこで自分が解放されるのを感じ、すべてを生き直して

みる気になったのであろう。〔……〕そして僕もまたすべてを生き直す気持になっているのを感じる⁽¹⁹²⁾」とムルソオは物語の終局において語っている。

こうしてムルソオの母の身体は三つの契機によって構成されていることになる。第一に具象的身体としての不在，第二に抽象的身体(知恵)としての遍在，第三にムルソオの母への同一化によるムルソオの身体を借りての復活。

対象の身体をその具体的特徴を剝奪して表象することは死の不安を回避する心の術策であることは既に見た通りである。しかしムルソオの母の身体の抽象性はアラブ人やマリーの場合よりはるかに徹底したものである。更に、アラブ人がその死後ムルソオによって殆ど忘却され、マリーも「死んだ」と想定されると直ちに「彼女はもう僕の興味を惹かない⁽¹⁹³⁾」と断言されるというように、いずれもがムルソオの心中においては死と同時にその存在の「現実性⁽¹⁹⁴⁾」を喪失するのに比べ、ムルソオの母は彼の心中において対照的に死後その存在の現実性を獲得し、遂には彼の身体を乗っ取り彼の存在と一致してしまうかに見える程である。母のこの不在と遍在という矛盾した存在様態と彼の死の不安はどのように関連付けられるだろうか。

親子の間に「根の深い共生関係」があるとき「そうした共生体は強い身体的なつながりをもつ」、そして「自分の身体が両親に所有されていると感じている子供は、身体の統合性というものを実感するのに非常な困難を経験する」と言われる⁽¹⁹⁵⁾。この身体の未統合感は、単に生得的な要因に基づく場合にも、それだけで既に死の不安を強めるものであるが、これが更に共生関係にも根差している場合には死の不安は一層強化される。「死の恐怖は、一人でいることと他者との関係を失うことを最も恐れる人びとの間で最も強く見られる」のである。というのも「死が、他人の死や自分自身の死によって、自分たちにとって重要なもの〔共生的生〕を失う可能性を含むからである。」つまり共生的生を生きる人、共生的人間にとって死の不安とは「分離不安⁽¹⁹⁶⁾」でもあるのである。従ってこのような人にとって自分の親のとりわけて母の死は二重に恐怖すべきこととなる。一方では、母と「共生体」を形成し母と同一化している人には母

の死は即自分自身の死を意味しよう。他方、母子関係が未だ分離していない子供にあっては「死と悪意ある遺棄の行為とは、しばしば等しい⁽¹⁹⁷⁾」からして、共生的人間においても母の死は「遺棄」とうけとられ分離不安としての死の不安が活性化する筈である。このように共生的人間にとって「共生体」は自身の生の中核であり命そのものですらあるのだから、「共生体」の崩壊という現実直面することをなんとしてでも回避しようとするであろう。そこに生ずるのが失った対象を自己のうちに取り入れてこれと同一化し、かく対象の延命を計ることによって対象の死を否認しようとする心の絡繰りである。

ここはまだムルソオの生育史を具体的に問う場ではないが、少なくともこれまでに確認された一方での死の不安の強さと他方での母への顕著な同一化の傾向からしても、心気症的訴えとなって現われている彼の身体的未統合感⁽¹⁹⁸⁾は生得の素質に因るとともに母との共生的関係にも原因があると言えるように思われる。親と共生関係にあった「子供は、両親との間で、お互いに『あなたは私であり、私はあなたである』というパターンを習得するため、後年、他の身体とのどの関係も潜在的に多かれ少かれ同じようなものと考えさせられるように」なり、「その結果、偶然出会うどの人物の身体とも必要以上に密接な関係を感じとってしまうようになる。」この「他人の身体との同一視⁽¹⁹⁸⁾」に対する反動として『『異質な』身体に対して広範囲に見られる防衛過剰の反応⁽¹⁹⁹⁾』が現われると言われる。この過度の「同一視」と「防衛過剰」によっても前項に指摘した母以外の人物の身体的異常を眼前にして昂まるムルソオの死の不安をある程度は説明しうるのであり、このことも彼と母との共生関係の傍証になる。奇形や老化といった他人の身体的異常を前にしたときに彼が示す著しく攻撃的な注視とそれと相関的な過剰に防衛的な身構えは、その背後に変形したつまり死の予兆を帯びた「他人の身体との同一視」が働いているためなのである。そしてこの過剰な共感作用の発動を防止するために、あるいは中和するために、一方で他人の身体の徹底的な抽象化、物化^{もの}が行われるのである。例えばムルソオが母を養老院に入れた理由の一つとしてこの「同一視」を考えることができよう。母

の老醜と死の兆は他の身体のそれとは比較にならぬほどに彼自身の身体の老化と死を予告するものであったであろう。そして現身の母との間に「同一視」が働かないようにするためにムルソオは死んだ母に⁽²⁰⁰⁾対面することを拒み、故人をただ単に「この死んだ女」(cette morte)と表象することによって自分とは無縁な存在とし、更には無名の「亡骸」(le corps)に⁽²⁰¹⁾まで還元しようと努めるのである。

尤もこの「同一視」が積極的な意味で働く場合もあり、それがマリーの生命的身体にムルソオが対した場合であって、マリーの健康な身体との「一致」つまり「同一視」によって彼は己が死の不安を祓おうとするのである。マリーの身体も抽象化されてはいるがそれは付与されている具体的特徴がステレオタイプなものであるという意味においてであって、ムルソオの母の身体の場合のような種類の具体的特徴も欠如した抽象性とは逆に共感作用を却て促進する態の抽象化である。ムルソオの願望と欲望の無限に受容可能な器となるべくマリーの身体は個性性の指標となるべきものを捨象されるのである。それは理想としての生命的身体であって、「壊れた操り人形」とか「身動きしない身体」と表現されるような物としての身体ではない。

さて、以上の次第で、ムルソオの死の不安を増幅する因子として彼の母との間の未済の共生関係が考えられ、そこに根差す身体の統合感の不足が先ず死そのものに対する不安を喚び、同時に、死がもたらす分離への不安を喚起するのであると言える。死の恐怖 = 個性喪失の恐怖に加えて、この「共感的共生的」⁽²⁰³⁾身体、死の不安 = 分離不安という三つの概念によって母の埋葬から殺人に至るまでのムルソオの心理過程の理解が可能となる地平が開かれると思われる。具体的な解釈に入る前に、共生関係とは何かということ、更にこの共生関係と、死の不安の両義性即ち個性出現への不安(分離不安)及び個性喪失への不安との関係をいまいし明らかにしておく必要がある。

前節で述べたように、人間の生の本能(エロス)は四位一体の構造を成している。即ち自己保存の衝動・性の衝動・攻撃性・情愛性の四つの要素によって

組成され維持されるのが生の本能である。分離の欲求とはこの生の本能を自己愛的自己保存の衝動に視点を置いて捉え直したものと言うことができる。つまり分離の成立には生の本能の四要素のすべてが前提とされるということである。また統合への欲求とは、この生の本能を情愛性を中心として捉え直したものであると言える。従って生の本能の本来の姿の下にあっては分離と統合は矛盾するものではない。分離即ち個性の確立と個体と個体の情愛的交感としての統合の成達は相即的な事態であって、分離は統合への信頼と再統合への確信があって初めて可能なのである。

だがある種の人々にあってはこの分離と統合とは二律背反の事態と観ぜられる。分離は即ち統合の断念であり、統合は即ち分離の放棄であると、つまり分離が情愛性の否定においてしか、統合が自己愛的自己保存の衝動の否定においてしか成り立ちえないと観ずる人々がいるのである。

そのような人々にあっては結局統合は個性の否定としての合体としてしか表象されえないのである。分離独立を欲求するとき、他方での自らの合体志向的情愛性は他者に投影される結果他者の統合欲求は合体欲求と映り、他者は桎梏、足手纏いとなる。本来は分離と統合の契機として働く攻撃性がここでは合体志向的他者を切り捨てる破壊的攻撃性として観ぜられる。それは反す刀でこの他者の合体志向に感応する自身の合体志向的情愛性を断ち切る攻撃性でもある。従ってこの場合の分離は誰よりも本人自身が先ず人で無しの業と感じざるを得ない仕方でのみ可能なのである。自分の独立を妨げ且つまた自分の独立志向を情知らずと非難する〔と自らには感じられる〕合体志向的他者を憎み、自他の合体志向的情愛性の黙殺によってまで分離に執する自分を非道の鬼と想う。かくして合体志向的情愛性の彼岸にある分離独立はいかなる統合の契機(情愛性)も欠如した孤絶と観ぜられることになる。それは後めたく又片意地な、孤愁に耐えつつ保持される自立なのである。

他方統合を欲求するときには、自他の分離の欲求は合体としての統合を阻碍するものと見える。合体は、先ず他者の個性の否定においてつまり他者を我

が - 儘にすることによって実現可能と思われ做される。しかし仮に首尾よくこの合体が成就したとしても、その関係は直ちに桎梏となり分離の欲求を目覚めさせないではおかない。このとき他者は事実においていかほど捨我的態度に徹しようとも合体に執する執我的個性として蘇ってくる。逆に合体は自らの個性の放棄によっても果たされうと思われ做される。即ち本来個性確立の契機として働くべき攻撃性を自己破壊的攻撃性に転じ他者の個性性に無限に同一化していくことによって合体は成就されると。しかし仮にこのようにして合体が果たされたとしてもそれは直ちに他者にとっては己が個性志向の桎梏と映ずることになる。人は自らのこの合体志向的情愛性を無情に振り捨ててゆく他者を怨嗟するとともに、他者の個性性実現の桎梏となつてまでも合体に執する自己のうちに否定した筈の執我的個性性の蘇りを認めざるを得ない。つまり捨我的合体と言えども他者の執我的個性性の否定においてしか成り立たず、捨我也畢竟他者を我が - 儘にする形式の一つなのであるということだ。執我的同一化にせよ捨我的同一化にせよ人は合体を夢見つつ却つて自他の我執に目覚めざるを得ないのである。いずれにせよ同一化による合体は否定された個性性への欲求が我執として蘇る限り破綻せざるを得ないのであるから、この我執としての自己愛的自己保存の衝動の彼岸になお止み難く渴望される合体的統合とは、いかなる分離の契機も滅却した自他未分の理想境であるだろう。それは執我的なものとは言え自他における個性性の否定においてのみ初めて夢見られうる境地であるが故に幻想に止まる以外にないが、幻想と知りつつも人はこれに固執せざるを得ない。何故ならば合体といえども統合の一つの形式なのであり、統合の欲求は生の本能であるからだ。

自己保存の衝動と情愛性は分離欲求と統合欲求へと分化発展していくのであるが、この自己保存の衝動と情愛性が矛盾することなくしかも自他未分離の合体が現実のことである場合がただ一つだけある。それは母と子の間の最早期における関係であつて、自らを生きることが即他を生きることであり他を生きることが即自らを生きることであるという「相互的同一化」が現実のこととして

(204)

ある状態である。これが一次的な共生関係であるが、ここにはなんら否定的な意味合いは含まれず、却ってそれは生の本能の分化発展にとって必須の一過程である。しかし自己保存の衝動と情愛性が分離と統合の欲求として発現する時期に至ってなお「相互的同一化」への固着が認められるとき、この「遷延した母子共生」⁽²⁰⁵⁾は分離と統合の実現の障碍となるものであって、それは生の本能の展開を阻碍する二次的な共生関係である。生の展開の現実を否定することによって成り立つこの「相互的同一化」はもはや幻想に過ぎず、「融合空想」⁽²⁰⁶⁾なのであって、これが先に合体の名で呼んだところの事態である。「融合空想」はたとえ相互的なものであろうとも、それが究極において他者の個性の否定においてしか成立しえない幻想である限り、その相互性は擦れ違いの、本質的にはナルシシズム的なものである。更に、先に述べたように、「融合」欲求に変質した統合欲求に見合って我執的孤絶に変じた分離への欲求をもやはり他方において人は抱くのであるから、自らの「融合空想」そのものに対して人は相反感情併存的にならざるを得ず、融合を夢想する主体自身のうちに融合を仮構のものにする要素が孕まれているのである。結局ここには孤絶としての分離も合体としての統合もそれを欲求する主体自身によって否定され空洞化されるという構造が見出されるのである。

死は個性性を有する即ち固有の歴史を有する身体宿命である。個性性の主張が我執的孤絶と観ぜられる共生的人間にあっては、その我執の故に我という個体の喪失としての死は人一倍恐れられるであろうし、又統合の可能性を自ら断つところに成り立つ孤絶としての個性性にとっては、生は個体として存在する限りでの生なのであり、死は「まったく死んでしまう〔無に帰する〕」⁽²⁰⁷⁾ことなのであるから、無としての死に言わば剃き出して直面するわけで個性喪失としての死への不安は一層強まらざるを得ない。

だが分離が孤絶として尖鋭に表象されるというのも自ら遠ざけた合体としての統合との対照の故に他ならない。共生的人間は合体への郷愁に引き裂かれつつ分離を保持するが故に分離は「労苦」⁽²⁰⁸⁾(effort)によって支え続けられなければ

ばならないものと観ぜられる。従ってこの分離は常に不安定な分離である。更に、他方の極にある潜在的な合体欲求の故にいかなる分離の行為も即分離不安を喚起しないではない。そして分離の極みとしての自他の死は自他いずれのことにせよ合体の可能性の決定的喪失として最大の不安の対象となるのである。

また、共生関係の相関者の死あるいはその予兆としての身体的異変は、合体幻想の現実的基盤の喪失を意味して直ちに分離不安を喚起するばかりではなく、相関者との同一化の故に己が死の不安をも目覚ますものとなる。幼少年期における母親あるいはその代理者との対象関係が以降の異性間同性間を問わずすべての対象関係の原型であるとするならば、共生の人間はすべての他者との間に「共感的・共生的」関係を仮構すると言える。従って誰彼の区別なしに他者の身体的異常に対すると直ちにその共感的・共生的身体意識の故に分離不安が喚び覚まされ、同時にそこに己が死の予兆をも感じとらずにはいられないことになる。

『異邦人』に戻ろう。先に推定したようにムルソオが母との間に二次的な共生関係を結んでいたとすると、「家に居たとき、ママはいつも黙って僕のことを眼で追うだけであった⁽²⁰⁹⁾」という彼の言葉からして、彼が母を養老院に入れた根本的動機に合体志向的他者として桎梏と映ずるに至った母からの分離の欲求があったと言える。「すべて健康な人間は、自分の愛する者の死を多少とも希った筈だ⁽²¹⁰⁾」と彼が言うのも共生的人間にとって己が分離の試みのすべては合体志向的他者への破壊的攻撃性と観ぜられるが故である。又この破壊的攻撃性は母との絆を断ち切る以前において自らの合体志向的情愛性の否定として働くが故に「今年になってほとんどここ〔養老院〕に足をむけなくなったのは、〔……〕せっかくの日曜日を潰してしま⁽²¹¹⁾うからでもあった」と彼は嘯くのである。このような分離はいかなる統合の可能性ももたない孤絶として尖鋭に表象されるが故に「ママも僕ももうお互いに何も期待し合わなくなっていた」とムルソオは言うのである。これに続けて「他の誰に対しても同じことで、我々はめい

めいの新しい生活に馴れていった」⁽²¹²⁾と母親との関係の様態が直ちにすべての他者との関係に一般化されているのも、少なくともムルソオの場合、母親との対象関係が他のすべての人間との対象関係の原型であると言えるからなのである。

先に示した共生関係の分析に従えば、孤絶としての分離の欲求の背後には合体としての統合の欲求が、合体幻想が潜在し続けている筈である。母の埋葬の日のムルソオの「僕はママを理解した」⁽²¹³⁾という唐突の感を免れぬ言表も「融合空想」あるいは「想像上の一体感」⁽²¹⁴⁾への固執を背景として初めて了解可能である。こうして前章に指摘したムルソオが母に示す根源的了解には幻想的という限定が必要とされることになる。そしてなおそれが根源的と呼ばれなければならないのは、この幻想が共生的人間にとって己が生の中核を成すものであり、命そのものだからなのである。

物語が「今日、ママが死んだ」⁽²¹⁵⁾と語り出されていることに注意しなければならない。母の死によってムルソオの抱く幻想の一体感が震撼され、これまで維持されてきた彼の安定的な心理的秩序が危機の予感のもとに揺ぎ始める。つまり膠着状態が崩れて破局に至る過程が、即ち一つの物語がここに始まるのである。

「今日、ママが死んだ」に「それとも昨日か僕は知らない。養老院から電報がきた。《ハハウエシス ソウシキアス》チヨウウイ ヲ ヒヨウス》これでは何もわからない。たぶん昨日なのだろう」⁽²¹⁶⁾と続くのは、母の死そのものに直接的な反応が示されず関心の焦点が日付の問題にずれているのは、語り手＝主人公ムルソオが己れの存在の中核を成している母との共生関係に罅を入れる母の死という現実には心の深部においては衝撃を蒙りながらも我知らず幻想の一体感を保持しようとしているからである。

母の死は「今日」のことか「昨日」のことかと問うたのは、葬式が「今日」なのか「アス」なのかという問題が先ず念頭に來たからである。というのもムルソオは続けて「養老院はアルジェから八十キロのマランゴにある。二時のバ

スに乗れば、午後のうちに着く。そうすれば、お通夜もでき、明日の晩帰れるだろう⁽²¹⁷⁾」と言っているからである。この日程の計算の背景には「休暇」の日数を最少限に止めたいという社長への気兼ねがある。ムルソオは勤め人と喪主という二つの社会的役割のいずれをもそつなく果たそうとして日程に腐心しているわけである。母の死は「僕のせいじゃない」⁽²¹⁸⁾つまり言わば降って湧いた突発事故であるが、起った以上は遣り繰り算段してどこにも支障のない臨時ダイヤを組まねばならぬというわけだ。

だがこうした日程のような外面的な事柄への関心の集中は内面の動揺から己が眼を逸せるための心の術策なのである。「これでは何もわからない (Cela ne veut rien dire)」は、論理的な文脈からすれば、これでは母の死は何時のことか一向定かではないということと言わんとしているのである。しかしこの表現のもととの「これは何の意味もなさない」という意味からすれば、電文は母の死をはっきりと客観的事実として告げているのであるが、丁度電文が括弧(guillemets)に閉じこまれて地の文から切り離されているように、その意味するところは語り手の意識から排除され不可解な記号の群がりと映るのであると言えよう。

己が内面の動揺を直視することを避けて外面的な事柄に関心領野を狭めることは自己防衛のための反射的な反応でもある。すべての変化に対して、とりわけ生活を根底から揺がす真のあるすべての変化を前にして反射的に既存の生活の枠組やリズムに固執しようとするのであり、又闇雲に秩序を持ち込もうとするのであるが、それは盲目的な我執的孤絶のなせる業なのである。日程も一つの秩序であり、そこに拘る心の動きは自己防衛的なものである。

社長は「お悔み」を述べるどころかムルソオの願ひ出た「休暇」のことで「不満そうな様子」を示した。「彼〔社長〕はきつと明後日、僕が喪に服しているのを見たとき、そうするだろう。」⁽²¹⁸⁾つまりムルソオが「喪に服している」姿を眼にしないう限り、遺族という社会的役割を外的に表示しない限り社長にはムルソオの母の死亡という情報は「何の意味もなさない」のである。だから社長に

としては「今のところママは未だちょっと死んでいないようなものだ。」しかし本当は、実際の配慮に埋没して母の死という現実⁽²¹⁹⁾に直面することを避けているムルソオにとってこそ母は「未だちょっと死んでいないようなもの」なのだ。「埋葬が済めば、今度はそれが片付いた〔分類された〕事件になり、すべてはもっと公的な外観を呈するだろう。」つまり「埋葬」の後彼は喪服姿を公衆に示すことによって自分が会社員であると同時に母を亡くした子でもあるということ。「公的」に承認されることになる。母の死という「何のことかわからない」と言わなければならないほど彼を茫然とさせる出来事も、「公的」に意味付けられ「分類された事件」となって、もはやムルソオという一私人が関心を払う必要のない出来事となるだろう。母の死という「分類」しようのない椿事が日常生活の外的な秩序にもたらした混乱も、この外的な秩序という保護膜の破れ目から溢れ出てくる虞のあった混沌とした内的世界も「すべてはもっと公的な外観を呈する」つまり旧の秩序に復するであろうと言うのである。従ってここに述べられているのは単に予測であるばかりかムルソオの願望でもある。生活の外的な秩序に縋ることによって彼は自らの内的な混乱から目を背けようとするのである。

養老院に到着すると早々に「ママにすぐに会い (voir) たかった」とムルソオは言う。母は死んでいるのだから、これは理屈からすると母の死顔を「見る」(voir) ことを望んだという意味である。がそれにしては「すぐに」というこの性急さが解せない。彼の立てた日程表からすると一晩通夜で養老院に居るわけであるから時間の余裕は充分にある筈である。この性急さは、彼が実際的な事柄に示す様々の配慮にも拘らず社会的儀式としての葬式というものについてはその要領を未だ充分呑み込んでいないことからくると先ずは解しうるだろう。養老院が執行する葬儀である以上先ず「院長に面会する必要がある」⁽²²¹⁾ということに思い至らなかったのである。又、母の死を飽く迄己れの内面と掛かり合うことのない外的に処理すべき事柄と見做そうとして、言わば雑務の一つとしての母との対面という儀式を早々に済ましておくに越したことはないと考えた

のだとも解しうる。だが彼のこの性急な態度は、これが生前の母を養老院に訪ねたときの習慣なのでありその無意識的な反復によって彼は母の死を否認しているのだとすると最も良く理解されるように思われる。彼が「三年前に」母を養老院に入れ、「今年になってからほとんどここへ足をむけなくなった」としても、それまでは「日曜日⁽²²²⁾」ごとに母に会いに来ていたのである。しかし彼が院長と旧知の間柄であるしは何もなく、それどころか院長が「お母様に関する書類は読みました。あなたには十分な扶養ができなかった」と言っていることからすると、ムルソオの母の死に際して初めて院長は息子としてのムルソオの存在に気付いたのだと言えそうである。又彼が門番に「ここにはもうながいんですか」とか「ああ、あなたはここの人ではないんですか⁽²²⁴⁾」と尋ねていることからすると、彼はこれまでせいぜいのところ挨拶程度の言葉を門番と交したただけでその他大勢の面会人のひとりに終始してきたのだと思われる。そして彼は「お母様のお友達の方々⁽²²⁵⁾」のうちの誰ひとりとして知らない。つまり母の生前において、ムルソオは院長と会ったこともなく、門番とは挨拶を交すくらいのもので、在院者の誰とも親しむことなく、いつも「すぐにママに会い」息子の義務を果たすとそそくさと帰途に就いたのであると言えそうである。このかつての習慣のままに今彼は動こうとするのであり、認識としては母の死を受けとめつつも、感情としては、母の死を確かめるために見るのではなくなお母が活着しているかのように会うことを願っているのである。(この項つづく)

《付記》 カミュの著作から引用した箇所⁵²の訳出にあたっては、新潮世界文学48『カミュⅠ』・同49『カミュⅡ』の訳文をほぼ踏襲し、『異邦人』については、新潮文庫版『異邦人』窪田啓作訳を随時参照した。

〔注〕(第2節つづき)

52) *Ibid.*, pp.13-14.

56) *Ibid.*, p.20.

53) *Ibid.*, p.14.

57) *Ibid.*, p.21.

54) *Ibid.*, p.13.

58) *Ibid.*, p.19.

55) *Ibid.*, pp.18-19.

59) *Ibid.*, p.18.

- (60)–(61) *Ibid.*, p. 25.
 (62) *Ibid.*, p. 28.
 (63) *Ibid.*, pp. 28–29.
 (64) *Ibid.*, p. 23.
 (65) *Ibid.*, p. 29.
 (66) *Ibid.*, pp. 42–43.
 (67) *Ibid.*, p. 44.
 (68) *Ibid.*, pp. 60–61.
 (69) *Ibid.*, p. 70.
 (70) *Ibid.*, p. 42.
 (71) Brian T. Fitch: *L'Etranger d'Albert Camus*, Larousse, 1972, p. 82.
 (72) 『異邦人』, p. 11.
 (73) *Ibid.*, p. 61.
 (74) 前節の注(334)参照。
 (75) 『異邦人』, p. 43.
 (76) *Ibid.*, p. 94.
 (77) *Ibid.*, p. 69.
 (78) *Ibid.*, p. 59.
 (79) *Ibid.*, p. 69.
 (80) *Ibid.*, p. 72.
 (81) *Ibid.*, p. 55.
 (82)–(84) *Ibid.*, p. 83.
 (85) *Ibid.*, p. 84.
 (86) *Ibid.*, p. 129. <étranger> という語は書名に採られていることからこの作品においてもつその意義は重要であると思われるにも拘らず、この箇所以外では用いられていない。表題の『異邦人』(L'Etranger)は「『他人』と訳さるべきではなかったか」という土居の提言には卓抜なものがある。彼は『異邦人』のうち潜む「甘え」の問題性を鋭く直観していたに違いない。ただ、「彼〔ムルソ

オ〕にとって母も知人もすべての人が自分と無関係の人となってしまったのである。いかえれば彼以外のすべての人間が彼にとって他人となったといってもよいし、あるいは彼が彼らに対し他人となったといってもよいであろう」という土居の解釈は語り手の主張するところを文字通り受け止めたもので皮相な解釈と言わざるを得ない。拙論が明らかにするように、ムルソオの「他人行儀」の裏には「特別の激情」が隠されているのである(土居健郎『「甘え」の構造』, 弘文堂, pp. 34–35.)。なお、拙論の問題意識と採った方法からして、「一見『甘え』の感情が存在しないように思われる欧米の社会にも、日本人の眼から見れば、結構そのような感情が見えてくるのではないか」(土居『「甘え」再考』, 『「甘え」の構造』第2版収録, 弘文堂, p. 219.)という土居の着想には大いに励まされるところがあったことを付記しておきたい。

(87) 『異邦人』, p. 56.
 (88) *Ibid.*, p. 57.
 (89) *Ibid.*, p. 45.
 (90) *Ibid.*, p. 73.
 (91) *Ibid.*, p. 80.
 (92) *Ibid.*, p. 104.
 (93) *Ibid.*, p. 105.
 (94) *Ibid.*, p. 106.
 (95) *Ibid.*, p. 107.
 (96)–(97) *Ibid.*, p. 108.
 (98) *Ibid.*, p. 106.
 (99)–(100) *Ibid.*, p. 108.
 (101) *Ibid.*, p. 107.

- (102) *Ibid.*, p. 73. (116) *Ibid.*, p. 88.
- (103) *Ibid.*, p. 63. (117) *Ibid.*, p. 104.
- (104) *Ibid.*, p. 73. (118) *Ibid.*, p. 65.
- (105) アラブ (Arabe) とモール (Maure) (119) *Ibid.*, p. 136.
 はその概念を元来異にしているが、イス
 ラム化されたモール人はアラブ人とも呼
 ばれる。『異邦人』においては、レエモン
 の情婦は「モール人の女(Mauresque)」
 (p. 50.) と言われるが、その兄は「アラ
 ブ人の男 (Arabe)」(p. 104.) と言われ
 ている。又刑務所の接見所でムルソオの
 「側は十人程の囚人が居た。大部分はア
 ラブ人だった。マリーはモール人の女達
 (Mauresques) に囲まれていた」(p.
 105.) というように、「アラブ人」の囚人
 の面会人の女達は「モール人」と呼ばれ
 ている。結局この作品ではアラブとモー
 ルは特に区別して使われてはおらず、た
 だ「アラブ人の女」を示す場合に〈(une)
 Arabe〉ではなく〈(une) Mauresque〉
 の方が選ばれているということになる。
 但し、女性を指示する場合にも形容詞と
 して使われるときには「アラブ人の看護
 婦(infirmière arabe)」(pp. 13-14.) と
 あるように〈arabe〉が用いられている。
- (106) 「内」と「外」の概念については、
 土居, 前掲書, pp. 38-40. (120) *Ibid.*, p. 134.
- (107) 『異邦人』, p. 79. (121) *Ibid.*, p. 102.
- (108) *Ibid.*, p. 80. (122) *Ibid.*, p. 11.
- (109)-(110) *Ibid.*, p. 82. (123) *Ibid.*, p. 146.
- (111) *Ibid.*, p. 127. (124) *Ibid.*, p. 92.
- (112) *Ibid.*, p. 83. (125) 土居, 前掲書, p. 44.
- (113)-(114) *Ibid.*, p. 86. (126) 『異邦人』, p. 17.
- (115) *Ibid.*, p. 87. (127) *Ibid.*, p. 49.
- (128) *Ibid.*, p. 72.
- (129) *Ibid.*, p. 58.
- (130) *Ibid.*, p. 72.
- (131) *Ibid.*, p. 134.
- (132) *Ibid.*, p. 135.
- (133) *Ibid.*, p. 125.
- (134) *Ibid.*, p. 87.
- (135) *Ibid.*, p. 146.
- (136) *Ibid.*, p. 88.
- (137) *Ibid.*, p. 142.
- (138) *Ibid.*, p. 171.
- (139) *Ibid.*, p. 135.
- (140) *Ibid.*, pp. 45-46.
- (141) *Ibid.*, p. 80.
- (142) *Ibid.*, p. 84.
- (143) *Ibid.*, p. 136.
- (144) C.-C. オブライエン『カミュ』, 富士
 川義之訳, 新潮社, pp. 9-10.
- (145) フィッシャー, 前掲書, p. 108.
- (146)-(147) 同書, p. 108.
- (148) 同書, p. 97.
- (149) 同書, p. 108.

- (150) 同書, p. 95.
 (151) 同書, p. 100.
 (152) 同書, p. 99.
 (153) 同書, p. 111.
 (154) 同書, p. 113.
 (155) 同書, p. 111.
 (156) 同書, p. 104.
 (157) 『異邦人』, p. 18.
 (158) *Ibid.*, p. 20.
 (159) *Ibid.*, p. 18.
 (160) ムルソオのアラブ人に対する関係を構成するこうした秘められた「親密さ」と理想化の二重の契機を考慮することによって初めて、『異邦人』がおそらくはアラブ人の読者すらをも魅了しうるであろう事態も了解可能となる。確かにこのような隠蔽と理想化という二重の否認は、いずれ現実からの手痛い復讐を蒙らないでは済まない。カミュの文学作品におけるアラブ人のイメージの変遷を辿ってみると、彼も又アラブ人に対するムルソオの心理的反応を本質的には共有していたと言えるのであり、1942年の虚構の人物ムルソオが知らない幻滅を1960年まで生きたカミュは味わわなければならなかったのである。(拙稿「カミュにおける文学表現としてのアラブ人」、『高知大学学術研究報告』第27巻収録, 参照。)
- 但し、もはや断わるまでもあるまいが、拙論は『異邦人』読解の鍵が作者カミュの人種〔民族〕的偏見にあるなどと言おうとしているのではない。拙論の採った方法からして作者のことは暫く措くとすれば、ムルソオの内には少なくともアラ

ブ人を別け隔てする心理が働いていることは確認しうるが、それを「人種的偏見」と呼ぶにしても、拙論の眼目とするところはその所在の確認に止まるところにも沉んや作品を突き抜けてそれを作者カミュの責めに帰して事足れりとするところにもなく、それをムルソオの精神構造全体の中に、換言すれば作品世界そのものの全体の中に位置付けるところにある。もし「『異質な』身体を見ることでひき起こされる敵対心と拒否的現象」が「普遍的なもの」であり、「非理性的な身体不安」が「人種的偏見を育てる母体」の少なくとも一部をなしているとするれば(フィッシャー, 前掲書, p. 127.), つまり我々に死の不安がある限り人種〔民族〕的偏見は避け難く言わば自然的なものであるとするならば、ムルソオの人種的偏見の由縁をその精神構造全体の中に辿ってみることはそのままより一般的に差別意識の自然的な発生過程を明らかにする道を拓くことにもなるであろう。

『異邦人』における人種〔民族〕的偏見の問題を扱うとき、我々自身のこの内なる自然的差別意識を併せて問題にすることがない限り、主人公ムルソオの正義と真実の代表者という「聖人化」(オプライエン, 前掲書, p. 35.)を免れたその足で無自覚的な人種〔民族〕差別主義者、自己欺瞞の徒ムルソオという裏返しの「聖人化」に陥る真が多分にある。

独善的且つ教条主義的な無自覚の予断がいかにテキスト無視あるいはその粗雑な読みを呼び、それが又いかに独善的且

つ教条主義的な結論に人を導くかを一つの実例によって示そう。オブライエンの立論に従えば、『異邦人』におけるアラブ人の役割は次のように解釈される。「撃たれた男〔アラブ人〕には名前がついていないし、彼と語り手やその友人との関係は人間同士の間柄ではない。彼は彼らをまるで『石ころか枯木』でもあるかのように眺める。語り手がこのうつろで異質の存在を撃ち倒し、『身動きしない身体になお四発撃ち、弾丸が跡を見せずに食い込む』とき、読者はムルソオが一人の人間を殺したということをもまったく感じないのである。彼は一人のアラブ人を殺したのだ。」(オブライエン、前掲書、pp. 35-36.)

拙論が明らかにしたところに照してみれば、この解釈は事実誤認の連続であると言わなければならない。「名前」がついていないのは「撃たれた男」だけではなく、親和的世界の住人以外のヨーロッパ人も又そうである。「彼」と語り手の「友人」(レエモン)との関係は、否定的な意味合いにしる、「人間的な間柄」である。「彼の無関心を装った「眺め」方には報復の情念が秘められていた。だがこの解釈の最も重要な誤謬はその結論の部分にある。ムルソオが殺したのが「アラブ人」であるから「一人の人間」が殺されたとは「まったく感じない」ような読者とは、人種〔民族〕的偏見が身に染みついたフランス人か、それに同一化している者だけであるだろう。語り手=主人公ムルソオがアラブ人を「非人間的な

存在」(同書、p. 35.)として扱うことが可能であり、しかもこれを殺害しても理不尽と感じさせないのはまさにそれがアラブ人であるからなのだ、というのはまさに一つの自民族中心主義 (ethnocentrisme) に拠る発想である。アラブ人もヨーロッパ人も同等の民族のカテゴリーにすぎない読者にとっては「アラブ人」殺害を「人間」殺害と「感じない」ことは不可能である。それにも拘らずこの読者が「感じない」とすれば、それは被害者がアラブ人であるからではなくて、読者が同一化しているムルソオが先ず「一人の人間を殺したということをもまったく感じ」ていないからなのである。

- (161) 『異邦人』, p. 88.
 (162) フィッシャー、前掲書、p. 232.
 (163) 『異邦人』, p. 97.
 (164) E. モラン『人間の死』, 古田幸男訳、法政大学出版局、p. 26.
 (165) 『異邦人』, p. 100.
 (166) モラン、前掲書、p. 27.
 (167) 同書、p. 30.
 (168) 『異邦人』, p. 100.
 (169) *Ibid.*, p. 53.
 (170) *Ibid.*, p. 65.
 (171) *Ibid.*, p. 110.
 (172) *Ibid.*, p. 107.
 (173) *Ibid.*, p. 162.
 (174) *Ibid.*, p. 33.
 (175) *Ibid.*, p. 55.
 (176) *Ibid.*, p. 66.
 (177) *Ibid.*, p. 81.
 (178) *Ibid.*, p. 109.

- (179) *Ibid.*, p. 123.
- (180) *Ibid.*, p. 132.
- (181) *Ibid.*, p. 133.
- (182) *Ibid.*, p. 134.
- (183) *Ibid.*, p. 149.
- (184) マリーの微笑 (sourire) や笑い (rire) が見られるのは以下の箇所においてである。I [部]-II [章], pp. 32, 33, 33; I-IV, pp. 55, 55, 55; I-V, pp. 65, 66; I-VI, pp. 71, 72, 74, 75, 78; II-II, pp. 106, 106, 107, 108, 109; II-IV, p. 149。マリーが登場する章でその微笑や笑いが観察されないのは彼女が証言台に立つ場面を描く II-III のみであり、彼女の置かれた立場からしてこれは当然のことに思われる。
- (185) *Ibid.*, p. 148.
- (186) *Ibid.*, p. 167.
- (187) *Ibid.*, p. 32.
- (188) *Ibid.*, p. 34.
- (189) *Ibid.*, p. 66.
- (190) *Ibid.*, p. 170.
- (191) *Ibid.*, p. 26.
- (192) *Ibid.*, p. 171.
- (193) *Ibid.*, p. 162.
- (194) *Ibid.*, p. 18.
- (195) フィッシャー, 前掲書, p. 199.
- (196)-(197) 同書, p. 234.
- (198) 同書, p. 125.
- (199) 同書, p. 124.
- (200) 『異邦人』, p. 20.
- (201) *Ibid.*, p. 25.
- (202) *Ibid.*, p. 76.
- (203) テレンバッハ, 前掲書, p. 249.
- (204) E. ジェイコブソン『自己と対象世界』, 伊藤洸訳, 岩崎学術出版, p. 54。同一化も個体と個体の一つの関係なのであるから勿論完全な同一化は定義上ありえない。又同一化の性質も親と子では異なる。親のそれは子供との同一化と共に自分の親との同一化を含む「二重の同一化」である。こうした留保を付してもなお最早期の母子関係の「本当の共生的性質」についてやはり語りうるのである(同頁)。
- (205)-(206) 同書, p. 55。尤もジェイコブソンは、「融合空想」は「遷延した母子共性」の相関物であるとともに幼児の発達過程で必須のものであって(同頁)三歳までは正常な現象であると言っている(p. 70.)。拙論では「融合空想」を前者の意味に限定して使う。
- (207) 『異邦人』, p. 165.
- (208) *Ibid.*, p. 85.
- (209) *Ibid.*, p. 12.
- (210) *Ibid.*, p. 94.
- (211) *Ibid.*, p. 12.
- (212) *Ibid.*, p. 125.
- (213) *Ibid.*, p. 26.
- (214) 土居健郎『精神医学と精神分析』, 弘文堂, p. 105.
- (215)-(217) 『異邦人』, p. 9.
- (218)-(219) *Ibid.*, p. 10.
- (220)-(221) *Ibid.*, p. 11.
- (222) *Ibid.*, p. 12.
- (223) *Ibid.*, p. 11.
- (224) *Ibid.*, p. 15.
- (225) *Ibid.*, p. 17.